

〔書評と紹介〕

田端 宏・桑原真人・船津 功・関口 明共著

『北海道の歴史』（新版県史シリーズ1）

榎森 進

本書は、現在山川出版社で刊行中の「新版県史シリーズ・1」である。本書を編むにあたっての著者達の問題意識については、「あとがき」に旧版刊行後「約三〇年が過ぎたが、この間の北海道の歴史は激しく揺れ動く時代」であり、「このような激変する現代を含めて、旧版にかわる北海道史の通史」をまとめたのが本書とあることや「参考文献」の冒頭で記している「北海道における地域史研究の現状と課題」等によつて窺うことができる。特に近年の当該地域に関する研究史を踏まえううえで問題意識について云えば、後者文末の「北海道における地域史研究は、北方日本が北東アジアなどへ広く接続し、また日本列島における歴史の展開にも深く関係してきたことをあきらかにしつつある。そして『アイヌ文化振興法』の制定（一九九七年）にみられるように、多文化主義の社会が成立しようとする時代に、多様な価値観、それぞれの基盤となりうる歴史研究の重要な部分になわなければならない」との文章に要約的に表現されているように思う。この点を確認したうえで本書の編目構成の大略と各章の執筆者及び各章毎の頁数を示すと次の通りである。

一章―文化は北から南から／1北海道の黎明／2北海道独自の文化
／3 擦文文化と渡嶋蝦夷（関口明）。三四頁。

二章―「夷島」と中世国家／1アイヌ文化の成立と和人／2 和人手配の強化とアイヌ民族（関口明）。二六頁。

三章―幕藩制成立期の松前・蝦夷地／1統一日本と松前・蝦夷地／2 シヤクシャインの戦い／3 商人資本の蝦夷地「開発」（田端宏）。三八頁。

四章―クナシリ・メナシの戦いと蝦夷地幕領化／1クナシリ・メナシの戦い前夜／2 赤蝦夷の動き／3 蝦夷地幕領化（田端宏）。三九頁。

五章―開港を迎えて／1蝦夷地の再幕領化／2 幕末期の松前・蝦夷地（田端宏）。二六頁。

六章―開拓の時代／1維新政権と北海道／2 三県一局時代と北海道（船津功）。三三頁。

七章―「資本の移住」を求めて／1北海道庁の設置／2 内国植民地・北海道（桑原真人）。三四頁。

八章―開拓計画のもとで／1産業構造の転換／2 転換期の北海道社会（桑原真人）。三三頁。

九章―十五年戦争と道民／1第二期拓殖計画／2 北海道の戦時体制（船津功）。二四頁。

十章―総合開発を越えて／1戦後の復興／2 高度成長期の明と暗（田端・桑原・船津・関口）。三一頁。

風土と人間―もう一つの広大感と開拓史感―（田端宏）。七頁。

右の編目構成から分かるように、日本史の時代区分との対応関係では、一章が原始・古代、二章が中世、三章～五章が近世、六章～九章が近代、十章が現代である。まず本書を通して評者が感じた本書の内容に関する全般的な特徴点について述べると、第一に、近年の北方史研究の研究成果を積極的に吸収して記述していること。特に北東アジアと日本社会との相互関係に積極的に目を向け、広い視野から北海道に展開された歴史の特徴を把握しようとしていること。こうした傾向は特に前近代史、とりわけ原始・古代・中世の歴史記述に顕著にみられること。第二に、南の沖縄（琉球）の歴史との比較の視点を導入していること。こうした傾向は特に近代史の記述に顕著にみられること等の諸点がそれである。それだけに本書は、従来の北海道史とは一味違う新たな北海道史を描いている。こうした特徴を有する歴史書であるだけに、随所に見られる新たな見解を各時代毎に紹介したいところだが、紙幅の関係から、ここではその一部を紹介し、また評者が疑問を感じた点について若干記すこととしたい。

第一章に関して。この章で注目しておきたいのは、『日本書紀』の阿倍比羅夫の北征の記事と北方考古学上の知見との相互関係に関する著者の解釈である。特に評者が関心を持ったのは次の諸点である。第一に、続縄文文化は、その後半期に自然環境の悪化によって東北地方に南下したが、比羅夫の北征は「東北地方の土師器文化圏における続縄文人の活動を国家的な秩序下におくことを企図した」ものであったとすること。

第二に、『新唐書』にみえる「流鬼」をサハリンに比定し、貞観十四年（六四〇）唐に朝貢した「流鬼」の「王」をサハリンのニヴフ（ギリヤ

ーク）かウイルトとし、比羅夫の遠征の目的には「サハリンの朝貢以降動揺する渡島蝦夷を沈静化することにあつた」とすること。第三に、オホーツク文化の起源に関する諸説を①アムール川下流域の靺鞨（ウリチ民族）説、②サハリンのアイヌ民族（樺太アイヌ）説、サハリンのニヴフ民族（ギリヤーク）説の三説に大別したうえで、古代の史料に「肅慎」と表記されているもののなかに「オホーツク文化の荷負者が含まれていることはあきらかで、北海道と関連する肅慎はオホーツク文化人」との認識を前提にして比羅夫が大河の辺で接触した「肅慎」をオホーツク文化人と解していること。さらに『続日本紀』養老四年（七二〇）条に渡島津輕津司從七位上諸君鞍男ら六人を「靺鞨国」に派遣した記事があるが、「この靺鞨が肅慎と同義で使われているなら、古代国家がオホーツク文化人と積極的に接触をもととした」と解していること等の諸点である。極めて魅力ある見解であるが、評者が疑問に思うのは、この文脈から窺えるように、著者はオホーツク文化の担い手を肅慎＝靺鞨と理解していることである。オホーツク文化が「靺鞨文化」の影響を強く受けた文化であることは間違いないが、管見の限りオホーツク文化人＝靺鞨という見解は未だ定説になっていないと判断されるので、論をここまで発展させることには大きな疑問を感じざるをえない。

第二章に関して。コシヤマインの戦いの歴史的背景について「この強烈な反撃の背景の一つには政季（安東政季・引用者）による『三守護体制』から排除された旧館主層の不満があつた」とし「政季とともに渡島した河野政通が箱館の館主についたが、それにより前館主（名前は不詳）とのあいだに確執、たとえば館主であることによりもたらされてい

た交易上の利益をめぐる対立が生じたことは十分考えられる」としているが、こうしたことをも想定するのであれば、「参考文献」に入間田宣夫他編『北の内外世界―北奥羽・蝦夷ヶ島と地域集団―』（山川出版社、一九九九年）を挙げているのであるから、少なくとも同書収録の入間田論文の内容をも紹介したうえで著者独自の見解を記述してほしかった。

同書収録の入間田論文「糠部・閉伊・夷が島の海民集団と諸大名」で入間田氏は、コシヤマインの戦いの歴史的背景を解釈する場合、安東太師季の再渡海による「南部の平和」の崩壊、すなわち北方世界における統治の大枠の崩壊という問題を視野に含める必要があるとの新たな見解を提示しているからである。これと類似した問題点として、本章の著者は北海道と北東アジアの関係について随所で記しているにも拘わらず、洞富雄氏・菊池俊彦氏・遠藤巖氏・中村和之氏や評者が論じてきた一三〇―一四世紀初頭におけるサハリンを舞台としたモンゴル・元朝の「骨鬼」（アイヌ）征討の問題や一五世紀に明朝がアムール河最下流域のチルに奴児干都司を設置すると同時にアムール河下流域やサハリンに羈縻衛を設置した事実と列島北方世界の歴史との関係については殆ど触れることなく僅かに『諏訪大明神絵詞』中の「唐子」の解釈で、「唐子」は「中国人」を強力に意識した呼び方であるとしたうえで「十三世紀後半、元が沿海州・樺太を攻撃する緊迫した状況のもとで、『唐子』（中国人）が住む隣接の『外国』の存在が急激に浮上してきたのであろう。そしてそれが北海道の日本海側に住むアイヌ集団の呼称に転用したと考えられる」・「近年中村和之氏となえる『北からの蒙古襲来』」の一端を、『唐子』の呼称のなかに垣間みることもできよう」という内容で触れられて

いるに過ぎないことは残念である。付録の「年表」にも元朝の「骨鬼」征討のことや明朝の奴児干都司及びサハリンへの羈縻衛の設置のことが一切記されていないことは、こうした歴史認識を反映したものとみられる。また「唐子」の解釈でもこれを無前提的に「中国人」と解釈することにも大きな疑問を感じる。

第三章に関して。慶長九年の松前志摩守宛家康黒印状を「領知判物」とし、「家康以降の將軍が発給する領知判物は朱印状となる」と表記しているが、古文書学では「判物」は発給者の花押を据えた直状形式の文書のことで、近世に將軍が諸大名に発給した「領知宛行状」は、原則として一〇万石以上が領知判物、一〇万石未満が領知朱印状であつたから、松前氏宛將軍の黒印状・朱印状を「領知判物」と記すことには問題があるように思う。

第八章に関して。二四五頁に「アイヌ民族が『神の魚』（カムイチェップ）とあがめる鯨は」とあるが、アイヌ民族は鯨を「カムイチェップ」とは呼ばない。アイヌ語の「カムイチェップ」は「サケ・鮭」のことである。なお「鯨」はアイヌ語で「ヘロキ」という。こうした間違いは、参考にした今田光夫著『ニシン文化史』の間違った記述にそのまま依拠したことによって生じたもので、ごく初歩的な間違いである。また二五八頁に「明治二年の五万八四六七人が大正七年には二一六万七三五六人となり、実に三七・一倍の増加である（なお、この人口には先住のアイヌ民族は含まれていない）」とあるが、疑問に思うのは括弧内の注記である。

この人口は『新北海道史』第九巻・史料三所収の「統計・人口」の数

字と一致している、この書に拠ったものとみられるが、同書の「世帯数および人口の推移（元禄14～昭和50年）」の「備考」に、明治2～14年は『開拓使事業報告』に、大正7年は『北海道統計書』に拠ったとあり、また「明治2～5年は、『開拓使事業報告』では、館藩管内（福山・江差地方）が遺漏しているものと思われ、記されているアイヌ人口も、同6年以後と比較すると非常に少ないが、そのまま記載した」とあるので、『新北海道史』第九卷所収の明治二年の人口と『開拓使事業報告』第一巻記載の同年の人口を照合すると、五万八千四百七人という人口は、後者には「本籍」と「寄留」人口の合計で、しかもこの人口は「宗門調」に依拠した数字とある。ところでアイヌ民族が「日本国民」に編入されたのは、明治五年二月一日に実施された「戸籍法」によつて作成された新たな戸籍（いわゆる壬辰戸籍）にアイヌ民族が登録されたことによるが、全道でアイヌ民族の戸籍が完成したのは明治八～九年とされているので、明治二年の人口にはアイヌ民族が含まれていない可能性もある。こうした事情を考慮すると、明治二年の人口については著者の注記も納得できるが、明治二年のみならず大正七年の全道人口についてもアイヌ民族が含まれない旨を敢えて注記をしていることは、著者は『新北海道史』第九卷所収の近代における全道人口にはアイヌ民族が含まれていないことを裏付ける根拠を有しているからであろう。であればその根拠を明記するのが当然だと思うが、残念ながらその根拠を一切記していない。『新北海道史』第九卷所収の全道人口をアイヌ民族を含めて理解するか否かという問題は大きな問題であるだけに重要な問題点として指摘しておきたい。このことは単に統計数字の解釈のしかたという問題

にとどまらず、日本の近代国家がアイヌ民族をどう把握し、どう位置づけていたのかというきわめて重要な問題を含んでいるからである。

さらに若干気になったことは、序章に相当する「風土と人間」での「開拓精神」に関する歴史的評価と、本章の「北海道的生活文化の形成」で述べている移住一世の「開拓者精神」の歴史的評価の間に大きな相違が見られることである。前者では「開拓精神」なるものに「進取の気性」を見ることには否定的で、「不利な土地でもっとも困難な開拓に従事した一般農民の開拓者としての精神的支柱は、勤儉貯蓄、克己の精神など伝統的な倫理観そのもの」で「伝統的価値観を超える進歩性とか、独立心」というような面を強調する見方には否定的であるのに対し、後者では「彼ら（移住二世のこと・引用者）には、移住一世がもちあわせていた『開拓者精神』とか『進取の気性』といったものが希薄であった」としているように、「開拓者精神」に「進取の気性」を認めている。本書は北海道史の通史なので、よく言われる「開拓者精神」に対する歴史的評価については統一の見解を示してほしかった。

以上評者が気付いた若干の特徴と問題点を指摘してみた。しかし、本書は全体として北海道の新たな歴史像を提起していることは間違いない。

（四六判、三七六頁、山川出版社、二〇〇〇年九月刊、一九〇〇円）

（えもり・すすむ 東北学院大学文学部教授）